

聞名仁教

第 193 号 毎月発行
(発行日) 2026 年 10 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

おろかな苦勞

佐々木蓮磨

天理教祖は「阿呆は神の
お願いじゃ」と言われたそ
うですが、これは一つの真
理を語っていると思います。

これは何の役にも立たぬこと
で、考えれば考えるほど苦
悩を増すばかりであります。

れば考えるほど苦しみは増
すばかりで、何らの効果も
ないことであります。

ら次に思いめぐらし
て重苦しい気持ちにな
る場合が多いのです。
これは徒らに頭の中
で仕事の負担を倍加
して行くもので、精神的に
押しつぶされるような気持
になるのは当然です。

人間は知恵がすぐれるほ
ど、世の中を複雑にし、心
の願いを殖やして苦しんで
いるように思われます。そ
のため人間の苦悩には極め
て馬鹿らしいものがいろい
ろあります。その一つは「取
り越し苦勞」であり、その
二は「取り返えし苦勞」で
あり、その三は「思い過ぎ
苦勞」であり、その四は「担
い過ぎ苦勞」でありましょ
う。

第一の「取り越し苦勞」
というは、まだ来ない将来
のことを今から取り越して
いろいろと心配し悩むこと
です。これは、まことに馬
鹿らしいことで、将来どう
なるか?と言った、全く分
からぬことを、いろいろと
考えて苦しむことです。こ

第二の「取り返し苦勞」
というは、いわゆる世間で
「愚痴」といわれるもので、
過ぎ去ったことを心の中で
取り返えして、どうしてあ
のようなことをしたのだろ
うか、などと、全く取り返
しのつかぬことを考えめぐ
らして悩むことです。これ
も無用な苦悩と言わなくて
はなりません。

第三の「思い過ぎ苦勞」
というは、何か一つのこと
について、いろいろと思い
過ぎて苦しむことです。た
とえば、ある一つの自分の
行為についても、他人が如
何に考えているだろうか、
また誤解をしてはいないか
とか、いろいろに思い過ご
して苦悩することです。こ
れも全く分かるはずのもの
ではないのですから、考え

第四の「持ち過ぎ苦勞」
というのは、いわゆる仕事
を持ち過ぎて苦勞をするこ
とです。人間というものは、
どう考えても一時に一事し
かできません。もちろんラ
ジオを聞きながら掃除をす
るとか、いったような単純
な仕事は、どうにかできま
すが、少し複雑な仕事にな
ると、どうしても一時に一
事しかできないのが当然で
す。

ところが、人間は頭の中
でいろいろな仕事を沢山に
背負うて苦しむ場合が非常
に多いのであります。こと
に最近では社会生活が複雑に
なってきましたから、いろ
んな仕事が増えってきました
ので、いたずらに頭の中で
「これもせねばならぬ」「あ
れもせねばならぬ」と次か

こうして精神的に次から
次へと架空の苦しみをこし
らえて行くのですから、
いつしかノイローゼという
精神病にかかるわけです。
現代人は知能が優れている
といわれますが、その反面
には無用なところになり知
性を動かすようになります
から、苦悩は増大して現代
病といわれるノイローゼに
罹るのは当然の結果でしょ
う。

人間はいろいろな知識を
増大していくと同時に、正
しい智慧の眼を開らき、人
間能力の限界と妄念妄想の
実体とを明らかにして、余
計な計らいから脱する工夫
をすべきです。いかなる場
合でも苦しむ必要のないと
いうことを明確に知ること
が大切であります。

清沢満之先生に学ぶ 18

清沢満之先生の『我が信念』の文の前の続きです。

* *

第三。私の信念は、どんなものであるかと申せば、如来を信ずることである。

其如来は私の信ずることの出来る又信せざるを得ざる所の本体である。私の信ずることの出来る如来と云う

のは、私の自力は何等の能力もないもの、自ら独立する能力のないもの、其無能の私をして私たらしむる能力の根本本体が、即ち如来である。私は何が善だやら、何が悪だやら、何が真理だやら何が非真理だやら、何が幸福だやら何が不幸だやら、何も知り分る能力のない私、随って善だの悪だの、真理だの非真理だの、幸福だの不幸だの、と云うことのある世界には、左へも右へも、前へも後ろへも、どちらへも身動き一寸もすることを得ぬ私、此私をして、虚心平氣に、此世界に生死

することを得しむる能力の根本本体が、即ち私の信ずる如来である。私は此如来を信ぜずしては、生きても居られず、死んで往くことも出来ぬ。私は此如来を信ぜずしては居られない。此如来は、私が信ぜざるを得ざる所の如来である。

* *

清沢先生がどうして私は如来を信ずるに至ったか、その三つ目の理由を体験的に述べられた箇所です。そこで自分の信心はどういう信心かという、何かの経文を信じるというような信心ではなく、端的に「如来を信じる」信心であると先ずいわれます。そしてその如来を信じるのは、「信ずることの出来る又信せざるを得ざる」そういう如来であるといわれます。これはどういふことかという、信じようか信じまいかというような、自分の方で選んで、それから信じるというよう

なものではなく、どうしても信じざるを得ない、そういう信心である。疑つても疑つても疑えない、そういう信心である。そういう意味では、どうしても「認めざるを得ない」信心なのである。いわば「なにかわからぬものを、分らないけれど信じましょう」というような信心ではなく、認めざるを得ないという信心。いわば「ああそうだったのか」というような目覚めという性質をもった信心なのでした。普通、信仰とか信心とかいうと、考えても分からないけれど、疑わずに信じようというような信心というのが一般的です。それゆえ「あの人は信仰している」などという、何か特殊な教義を固く信じている人というイメージもありますが、清沢先生の場合には、そういうなにかの教義を固く信じているというようない信心ではなく、これはどうしても認めざるを得ないという、そういう信心なのです。疑ったら消えてし

まうような信心ではなく、疑つても疑つても疑うことのできない、そういう信心です。ですから「信心」とか「信念」という言葉よりも「目覚め」という方が分かりやすいかもしれません。

ではそういう「信心」とはどういう内容かというところ。「私の自力は何等の能力もないもの、自ら独立する能力のないもの、其無能の私をして私たらしむる能力の根本本体が、即ち如来である。」といわれます。これは先生の目覚めの基本になる言葉です。この「無能の私」とはどういう私なのかを次に説明されます。それは「私は何が善だやら、何が悪だやら、何が真理だやら何が非真理だやら、何が幸福だやら何が不幸だやら、何も知り分る能力のない私、随って善だの悪だの、真理だの非真理だの、幸福だの不幸だの、と云うことのある世界には、左へも右へも、前へも後ろへも、どちらへも身動き一寸もすることを得ぬ私」といわれるのです。

何が善か何が悪か突き詰めていったら分からなくなるといわれます。たとえば、人を殺すのは絶対に悪かという、ある殺人鬼が侵入してきて家族を殺しにかかったので抵抗して相手を殺してしまったというの悪かどうか。あるいは他国の軍隊が侵略して戦闘が行われた場合は相手と闘うことが悪かどうか。又、二十世紀の前半、ドイツでヒトラーの指示で多くのユダヤ人やロマを収容所で大量虐殺を行っていた頃、このままではどれだけ罪なき多くの人びとが殺戮されかねないというので、ヒトラーを暗殺する計画に参加したキリスト教の牧師でボンヘッファーという勝れた神学者がいきましたが、暗殺計画は挫折、逮捕されて、1945年、ドイツ降伏直前にフロッセンビュルク強制収容所（39歳）で処刑されました。こういう場合、ヒトラーを暗殺するという殺人行為は悪なのかどうか。これは非常に難しい問題です。あるいは政策上の問題

でも、人口を増やすのいいのか減っていくのがいいのかとか、自国の武装はさらに強力にすればいいのか、あるいは非武装にするのかなど、善か悪かを決めるのは非常に難しい。ただ、今この時点でどう考えどう行動するのが「より善い行為」であるかというところはあるに違いない。しかしそれを明確に知ることが出来ない。それを知る能力がない。そしてたとえ「より善い行い」が分かったとしても、それを実行すること

とがまことに難しい。たとえこれが善なる行いであると分かってもそれを実行することが困難であるということとは個人的、日常的にも山ほどある。こういう問題を真剣かつ真面目に取り組むと無知無能の自分にぶつからざるを得ない。先生は極めて至誠の人であり、またとことん考える思索の人だったので、こうした善悪の問題や、何が真理で何が幸福なのかなどの人生の基礎になる問題を真剣に問うていったのでした。そして

とうとう一切分からなくなつて「左へも右へも、前へも後ろへも、どちらへも身動き一寸もすることを得ぬ私」になつてしまつたのでした。普通はそこまで考えずにいい加減なところで妥協したりほつたらかして生きています。しかし先生はこれをハッキリしなくては生きてもおられず、死んでいくこともできないとまで突き詰めて、人生の根本的な問題に真剣に取り組まれたのです。

ところが自分の誠を尽くしていった結果、まったく行き詰まつてしまい、どうすることも出来なくなつたのです。

ところが、「自分の思索や思考や思い」がまつたく行き詰まつてしまつたのですが、「身」は「虚心平氣に、此世界に生死」している、そういう身の事実を発見されたのです。思いは行き詰まつてしまつた、にもかかわらず身は一瞬一瞬生きていく、そういう身の事実であつたのです。自分の考えや思いはどうにもならな

くなつたが、そういうことに一切無関係に心臓は動いている、息している、「今ここに生きている」という単純であるがまつたく否定できない生の事実にあい「あ私はここにいて、生きていく、いな生かされている」という単純であるが、疑うことの出来ない事実をめざめたのです。そしてこの生きていく一瞬一瞬の事実を成立せしめている力、それはもう自分の力などではない不可思議なはたらき、それを実感したのです。それは小さな力ではなく、自分のみならずありとある存在をしてあらしめている力であることが自然に了解されたのです。このはたらきにおいて私たちは生まれ、このはたらきによって生きるものが出来、このはたらきの中で死んでいく。私の全体がこのはたらきの中の営みであつたと知り、それを「此世界に生死することを得しむる能力の根本本体」といわれ、これを伝統的な仏教の言葉で「如来」といわれたのです。まさに無量

寿如来ですね。

無量とはサンスクリット語でアミタ、寿命はアーユスですから、アミタアーユスで阿弥陀仏です。こうして先生は阿弥陀如来のことを「能力の根本本体」とか「無限の能力」といいました。極めて斬新な表現です。阿弥陀仏のことをこういう表現で表された意味は大きいのです。阿弥陀仏を無限の能力と表したことで、阿弥陀仏の本質には物質的なはたらきという意味も含まれてきますから、無量無限な物質の領域を阿弥陀仏は本質としてもっているという事です。それまでは阿弥陀仏といえば、もっぱら智慧と慈悲（光明）だけで表されるのがほとんどでした。しかし、現代は自然科学とか経済という物質的領域が人間生活に大きな影響を与えています。ところが阿弥陀仏は物質的存在を成り立たしめている無限な能力であるといえますので、大自然や経済などの領域においても深い関係があることになります。

物質のはたらきの一つである私の肉体もその存在の元に阿弥陀仏のはたらきがあるということ、それによつて肉体的存在が成り立っているといえます。「今ここに一個の物として存在しつつある」という極めて単純ですが、基本的であり、リアルな実在である「我が身」は自分のいろいろな「思いや考えや価値判断」に先立つて存在している。この今、今と私の存在を動かしている根本的なはたらきがある、それを清沢先生は感得し、そこに如来を見いだしたのです。

この如来がましましてこそ「此私をして、虚心平氣に、此世界に生死することを得し」めてくださるという自由を見いだしたのです。思いは行き詰まつても、いのちのはたらきは行き詰まりません。「虚心平氣に」生かしてください。このはたらきに乗托して生きる、ここに自由を見いだされたのです。こうして先生は「私は此如来を信せずしては、生きても居られず、

信仰夜話

死んで往くことも出来ぬ。私は此如来を信ぜずしては居られない。此如来は、私が信ぜざるを得ざる所の如来である。」といい、私はこの如来によつて生きることが出来、また死んでいくことが出来るのだといわれるのです。生きるも死ぬるも阿弥陀仏のいのちの営みの中であります。この如来を信じなくては生きることすら死ぬことも出来ない、「私は此如来を信ぜずしては居られない」といわれるのです。

道元禅師も「此生死は即ち仏の御いのちなり」といつています。こういうことは、本当は今ここで誰でも気づき得るはずのものです。でもなぜか一番身近かなこの事実になかなか気づかないのです。それゆえ阿弥陀如来様は南無阿弥陀仏の名となり声となつて、すなわち

お念仏となつて、私たちに、この事実に喚びさますべくはたらいいてくださるのです。

(了)

「安政四年十月廿九日、一蓮院、時に七十歳、後生を大事とて明信寺の宅に至る。此時、同寺曰く。

「今まで聞いたる事に聞き足すなり。それで決定の信はなきなり。今までは凡心なり。その外に御恩をいたゞいて、往生を決定するのぢや。」

(佐々木月樵編『秀存語録』より)

これは、一蓮院秀存師が明信寺の住職のところに行つたところ、法談義の為に行つたところ、住職が言つた言葉である。仏法聴聞は、仏法を聞いてそれを我が心にためて、それを重ねていくことではない。その都度空っぽの心で聞くのである。

また、いろんな感動話を聞き歩くことではない。感動話を聞いて涙を流したからといってそれが信心を得た証拠とはいえない。説教をする人も感動話の種をいろいろ集めてそれを説いて聴衆を喜ばせようとするのはややもすれば名利である。また仏法を聞いて自分の心をなんとかきれいにしたり、善い心にしていくためではない。仏法を聞くとは阿弥陀仏の本願の救いを聞くのである。「助からぬ者を助けたもう」ご恩を聞くのである。南無阿弥陀仏のいわれを現在、現在に聞くのである。弥陀の本願、第十八願を何度も、聴くのである。ひとたびこの本願の、聞く度ごとに新鮮であり難いのである。たんなる感動話は三度も聞くと飽きが来る。

いつでも今の心、今のどうにもなつていない今の凡心に聞くのである。聞いても聞いても聞かぬ凡心に於いて、弥陀の本願を今、今

聞くのである。ちつとも聞かぬ「助からぬ我が心」に懸けられている阿弥陀仏の本願のなさけを聞くのである。今まで聞いたことの上に重ねていろいろ聞くのではない。いつでも第十八願を、初めて聞くように、今、今聞くのである。どうにもなつていない我が心にご恩を聞くのである。

ご恩とは助からぬ私のために五劫永劫のご修行によつて助けたもう力を成就しての南無阿弥陀仏の仰せ、「助からぬ汝を助ける」の絶対的決定を聞くのである。阿弥陀仏の決定について「往生を決定するのぢや」で、「あ私を丸々引き受けてくださる」といただくのである。

(了)

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日(火)午後二時始

講師 大阪市

藤井善隆先生

*なお同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。ご自由にお参りください。

住職雑感

*清沢先生の話に、春多くの人が桜見物に遠方まで出かけるのを聞いて、「私は家の庭の一本の桜を見るだけで充分楽しめる。お金を使つて遠くに出かける必要はない」という趣旨の話があつた。この心がようやく実感できる。美しい景色や変わった景色を見るために、国内どころか海外まで出かける人もある。それによいであろうが、身近な所にいくらでも美しいもの素晴らしいものが見られる。近くに武庫川の河川敷があるが、行くたびに草木や鳥のすがたに感動する。一本の桜の美しさを「本当に見る」なら沢山見る必要もない。一本の桜の花にいのちの輝きに感動する。逆にいかに沢山の満開の花を見ても、そこに生命の輝きを見ないと本当に花を見たことにならない。

*十一月二三日〜二四日まで金沢市大野町の名聲寺に出かける。法話は両日の午後二時からである。

今年2月6日(午後7時)の「聞名の会」は休ませていただきます。ご注意ください。